



ミンガラバーMJET News Letter

13-3-504, Minami Motomachi, Shinjuku-ku, Tokyo Japan 160-0012
Tel: 03-3353-6377, Fax: 03-3353-6377, E-mail: info@mjet-tokyo.com



村人に盛大な歓迎を受けた植林ツアー In Daing 村に 1,048 本を植林



8月25日

成田空港に19名が集合。バンコクで京都からの2名と合流。午後8時にホテルにチェックイン。

8月26日

朝からレストランにて交流会の出し物の特訓を2時間行い、その後にランチ。午後2時から「世界仏教徒瞑僧院」において、「ミャンマー日本青年仏教徒協会(MJBYA)」の日本語クラスの学生さんとの交流会。日本側メンバーは歌を3曲とマジックショー、炭坑節の盆踊り、マイムマイムのフォークダンスを披露しました。MJBYA側も歌を3曲とマジックショー、ミャンマーの踊りを2つ披露しました。その後、8つのグループに分かれ、日本語による会話で交流をしました。夕食後、雨が降りやんだので、シュエダゴンパゴダを参拝しました。

8月27日

早朝、午前4時に起き、ホテルを出発。メンバー(32名)は6:15発の飛行機でバガンへ。雨季にもかかわらず空は晴れ、空気は澄み切っていました。

ホテルにチェックイン後、Than Sin Kyae村へ。朝食をご馳走になってから、これまで植林された木々を視察しました。2008年に植えられた木々はすでに6~8mに生長しており、思わず「すごーい！」と歓声が上がりました。

ランチの後は林業省の2名の専門家のブリーフィング。午後4時ごろからEast Phar Saw村の植林の生長状態をみてから、遺跡を見学。夜の戸張が辺り一面を包みこむ静寂の瞬間に、「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。。。」を体感しました。

8月28日

朝食後、遺跡寺院を見学してからIn Daing村へ。村人は200の穴を掘って待ち構えていました。

バガン近郊のIn Daing村は、141所帯、730人からなる小さな村です。最初に、120名余りの村人とパートナーを決め、決められた場所に植林を実施。あっという間に200本が植林されました。ランチの後は、Than Sin Kyae村の青年とサッカー試合。惜しくも3対2で敗れてしまいました。



8月29日

午前中に再びIn Daing村で、450本を植林。前日のパートナーとの会話も弾み、植林のやり方に慣れてきた村人たちは、次々に植林を進めて行くので極めて効率的。ランチの後は、遺跡の見学とショッピングを楽しみました。夕食の後は、翌日の交流会のリハーサルをホテルの庭で行いました。

8月30日

朝から残りの398本をIn Daing村で植林。合計1,048本を植林しました。その後、141の農家を訪問。各家庭で大歓迎を受けました。植林のパートナーはそれぞれのパートナーの手を引いて自宅に導いてくれました。夕方は村人との交流会。出し物は歌、マジックショー、盆踊りとフォークダンス。村人の出し物は、2つの踊りでした。マイムマイムでは、全員が輪になって歓声をあげ、熱狂的に踊りました。村人も興奮収まらず、午後11時ころまで別れを惜しまました。

8月31日

ニャンウーの町の市場を見学してからポパ山へ。ポパ山中腹にある小高い丘に登った後、ホテルで久しぶりの洋食ランチを堪能。高速バスでヤンゴンへ。午後11時にホテルにチェックイン。長旅でしたが、珍しいミャンマーの農村風景を堪能しました。



9月1日

午前中、JICA が協力したツワナ橋、国立競技場、看護大学、総合病院を外から見学。ランチの後はボージョーアウンサン市場でショッピングを楽しみました。そして、午後6時に空港へ。楽しかった植林ツアーの名残りを惜しみながら帰路に着きました。

植林ツアー体験記【学生部】

観光

文責：三木大地
同志社大学政策学部3年

見渡す限りに広がる木々やパゴダを眺めることだけでも贅沢であるとは思われるが、綺麗な夕焼けを見ることができたことは、天候の関係から考えても非常にラッキーであったと思われる。また、ツアーに参加した我々は、パゴダの上においても「景色がすごい！」等の感想を述べ合っていたが、藤村会長に「ここは静寂を感じる場所である」と述べられたことにより、他の観光客を含めた我々全員で、瞑想のような沈黙の時間を過ごした。瞑想を行うことに対して、意味はあるのかどうか半信半疑ではあったが、実際に行うことにより、動物の鳴き声、木々が揺れる音、遠くから聞こえる村人の声等を楽しむことができ、日本では決して経験できない、非常に貴重で幻想的な雰囲気を感じることができた。



広大な地域に広がるバガンの遺跡群

植林ノート

文責：室田美鈴
東京大学新領域創成科学研究科修士1年

日本からの参加メンバー32名と現地 In Daing 村の村人(1日目は100人以上・2日目・3日日も50人以上が集まった)とでパートナーとなり植林を行った。植林は合わせて1000本近く行なった。植林場所は事前に現地の人達が穴を掘っておいてくださった。具体的な植林方法は、まず肥料に触れないように少し土を入れてから、苗木はほぐさずに形状



を維持して植える。その上に土をかけ、水をかけた時に土が流れても大丈夫なように、苗木を中心に山状に土をかける。その後たっぷりの水をかける。

私たちのグループは、1日目は50本程度・2日目は150本程度・3日目は50本程度植えた。3日目は学校の横の空き地に植林をした。村の人達の多大な協力により、時間的にはかなり短い時間で植林を行うことができた。



苗木に名札を付ける作業





村の人達の温かさにとっても感動した！

文責：亀山未夢
法政大学法学部 3年



植林もさることながら私のなかでとても印象に残っているのは、オプションプログラムの一つであったvillage lifeである。当初は村の家庭を数件訪問し、現地の暮らしを体験するというプログラムであったが、村の人達の希望により私たちはより多くの家を訪問させていただくことになった。どの家庭も牛やニワトリ、ヤギなどの家畜を飼っていたり、家は木や葉を使って作られていたり、冷蔵庫やテレビ、電気すらほとんどない生活をしていた。このような生活を実際に見たり触れたり体験するのが初めてであったので大変衝撃を受けた。しかし、それと同時に村の人達の温かさにとっても感動した。言葉も通じない初対面の学生を心から歓迎してくれたり、訪問した家庭一軒一軒ではお茶やお茶菓子を用意しておいたり、暑いからと団扇でずっと私たちを扇いでくれたり、私が興味を示したことはジェスチャーで一息懸命に伝えようとしてくれたりと本当にミャンマーの人達の温かさには感銘を受けた。この時味わった感情は、決して忘れることはないだろう。そして、この体験を通じ日本人がなくなってしまったであろう、近所付き合い、人とのつながりや家族と過ごす時間、自然との共存などの大切さに気づくことができたように思う。



事前勉強会の開催

MJET では植林ツアーに先立ち、以下の勉強会と事前準備を行いました。

6月23日(土)18時～ 場所：法政大学；参加者 19名

講師：神田道男理事 課題：「環境と開発」



神田講師は、環境問題がこれまで国際的にどのように取り組まれてきたか、環境問題の課題と国際機関や日本の取り組みを歴史的に解説し、更なる努力が必要なことを具体的に示された。受講者の感想の中から幾つかを紹介します。

- 今まで日本や世界で行われてきた、環境問題への対策は知っていたのですが、今回の勉強会では、より詳しいところまで説明してくれたので、とても為になる勉強会でした。また、私たちがミャンマーに行くにあたって、自国のことや世界のことを予め知っておくことが大切だと思いました。私たちが行く、ミャンマーの事も説明してくれたので、自分たちがどんな所に行くのかが分かったので良かったです。
- 環境と開発というテーマを今回は扱った講義でしたが、2つともいかにバランスをとれるかが非常に重要なテーマだと思いました。また CO₂削減も途上国にも努力してもらわないといけないと感じた。
- 環境問題の対処に関して途上国と先進国の捉え方の差があるとの話に関心を持ちました。開発協力をする際に key となってくる、複雑な問題だと思いました。
- 環境の面からみた国際協力の話が聞いて良かった。最後にミャンマーの概要の話を聴いて、こんなところに行くんだなーと思えて良かった。



7月28日(土)18時～ 場所:法政大学;参加者17名

講師:中嶋真美教授

課題:「観光と開発」



中嶋先生は、気候変動が自然環境に与える影響と観光のスタイルの変化との関わりから「エコツーリズム」という概念が生まれたことを解説された。「エコツーリズムは比較的手付かずに残された自然地域において、その地域に関する、より多くの事柄を鑑賞し、学ぶことを目的とする観光形態である」と定義されている(WTO, 2001)。以下、要点を紹介します。

- 「エコツーリズム」は経済的利益と環境的利益を生む地域資源を生かした地域振興・発展に資することが望ましいがエコツーリズムの人口は、国際渡航者数の約7～15%に過ぎない。
- 地域活用型エコツーリズムには、「地域住民—C」、「開発支援者—B」および「ツーリスト—T」という3つの主体が関わっているが、その活動実施による報償(Reward)の分配がコミュニティ全体に行きわたることが重要である。その事例として、モザンビークの「エコロッジ経営と地域支援活動」を取り上げて、NGOの慈善活動、水道プロジェクト、教育プロジェクトを紹介された。
- 講義は受講生に時々質問し、考えさせながら、語りかけて話され、非常に明快で面白く、またいろんなことを考えさせられる内容であった。特にバガン地区での「エコツーリズム」の実施においては、村人との協力と共に、植林後に村人とのように関わりを続けていくかが課題であり、コミュニティの発展に如何に貢献出来るか、MJETの力量が問われている。

勉強会の後で、中嶋先生と一緒に懇親会を開催しました。

秋の勉強会

10月28日(日)15時～ 場所: MJET事務局;参加者6名

ゲスト: Khain Nyein Soe さん、東京医科歯科大学博士課程1年
Khain さんは、藤村会長の「ミャンマー開発のための提案」に対して、おおむね賛同されて、「人々が公平に競争し、平等に発展の成果を共有できることを願っている。少数民族の問題は、根深いものがあるが、人々の貧富の格差が少ない発展を望んでいる」ことを強調された。

11月10日(土)15時～ 場所:法政大学;参加者9名

講師:村井純一氏:シニアアドバイザー

(株)丸紅、海外電力プロジェクト第一部

課題:「ミャンマー・ビジネスについて」



村井さんは、ミャンマーに駐在員として15年間過ごした経験をもとに、主に以下の点を強調された。

- 多様な資源に恵まれたミャンマーは開発のポテンシャルが高いが急激な変化に対応して実施する行政能力が不十分である。
- 11月2日に新外国投資法が承認されたが、運用が課題となっている。
- 2015年の総選挙の結果がどうなるかが不透明であり、注意する必要がある。
- インフラの未整備、法制度の未整備、裾野産業の未発達、中間管理層の不足、総選挙を含むカントリーリスクに留意する必要がある。

勉強会の後で、村井さんと一緒に懇親会を開催しました。